

「幕張」についての考察

——スティーヴン・ホールにおける建築術の実践

小 野 育 雄

(2008年11月12日 受理)

Study on “Makuhari”

-a practice of *architektonikē technē* in Steven HOLL

Ikuo ONO

Abstract

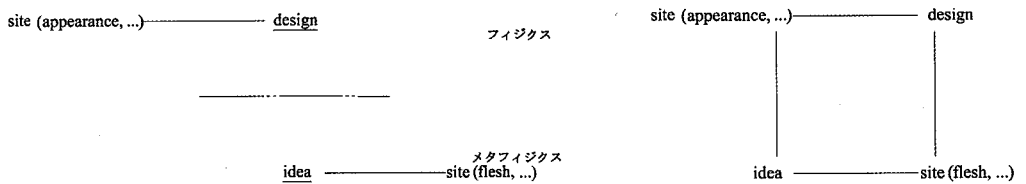
The intention of this paper is to make a thematic explication of Steven HOLL's architectural thought through inquiring into his practice of “Makuhari Housing”. The analysis consists of two main paragraphs as follows: Paragraph 2-1 explicates his architectural thought in the phenomenologically transcendental shift; in the shifting process of the phenomenological reduction. Paragraph 2-2 illustrates it in the phenomenologically transcendent-ontical phase.

Key words: site, Steven HOLL, transcendental aspect, idea, Makuhari Housing, transcendent aspect, design

1 はじめに

——言葉の解明から 作品化という実践についての分析へ

自身の建築することについて思索するホールの言葉には、〈メタフィジクスとフィジクスとの対化〉、〈ideaとdesignとの対化〉、〈siteの照顧において見ることの習慣的な仕方が遮断されてideaの発生してくるのを待つということ (ideaという力は周囲環境の置かれているその場所すなわち固有なsiteをめぐるって発生されるということ)〉、これらを見ることができ、鍵語、メタフィジクスとフィジクス、siteとideaとdesignには、つぎのような構造があることをすでに解明した。¹⁾



この構造はダイナミックさをもつ。したがってリニアに展開をたどる説明では十全な説明とはなりえない。しかしホールの言葉

siteは固有であり、したがってdesignを主導するidea, designを主導する力は、周囲環境の置かれているその場所をめぐるって発生しなければなりません。はじめは直観的に漂います。言葉や文章を書きとめ、ドローイングやスケッチをたくさん描きます。或るideaへ至るようになるまでにどれほどかかるのか知る方法はありません。²⁾ [GA, 23] ³⁾

にもとづきながら、つぎのように一から二へそして三の順にリニアにも断片的とはいえ展開表現できる。

三. ideaという力によってdesignが主導される。

一. ideaという力は、周囲環境の置かれているその場所、すなわち固有なsiteをめぐるって発生される。

||

siteという場所の照顾において、見ることの習慣的な仕方が遮断されて、ideaという力の発生されるのを待つ。—siteの照顾とは、そのsiteの脈絡のごく簡易な複製をつ

くることではない。いいかえれば、或る場所の相貌を明らかにすることとは、その場所のもつ見かけ (appearance) を確認することではない。したがって、見ることの習慣的な仕方が遮断されて、このときideaという力の発生されるのを待つ。—⁴⁾

||

建築とsiteとが、体験的に結びつくため、メタフィジカルにつながるため、詩的につながるためのidea、このideaという力の発生されるのを待つ。いいかえれば、建築と自然とが場所のメタフィジクスにおいて接合されるためのideaという力、このideaという力の発生されるのを待つ。その際、siteを、建築する建築を、それらのむすびつきを、フィジクスの態度において (科学的、超越的に) とらえることから、建築家はいったん離れなければならない。⁵⁾

二. ideaの発生へ至るために、かかる時間はそのつど異なり、どれだけ時間がかかるのかわからないが、はじめは直観的に漂う、つまり、言葉や文章を書きとめ、ドローイングやスケッチをたくさん描く。

ホールの思索に「肉 (flesh)」という語があらわれるつぎのようなものがある。

絡みあいは、内から外に交替する「あいだ」をもつ。われわれの身体は建築空間の実体を通じて動く、と同時に、われわれの身体は建築空間の実体と一体化する——「世界の肉」(M. メルロ＝ポンティ)。⁶⁾ [In, 16]

1984年のカナダの旅の途上でホールはメルロ＝ポンティの思索とはじめて出会ったという。以来、メルロ＝ポンティの思索の言葉の読みうるものを読み、自分の建築することはおおきく変化している、というのがホールの自覚である。⁷⁾ 幕張の集合住宅ほかの自作をとりあげつつ著した書に、上のように「肉 (フランス語chairの英米語訳flesh)」というメルロ＝ポンティ晩年の重要語が導入され、ホールの建築思索にその語は働かされている。ホールにおけるメルロ＝ポンティ参照はとりわけ、メルロ＝ポンティの「肉 (flesh (chair))」の思索に展開されている、現象学的に謂う (phenomenologically) 「現象的 (phenomenal)」⁸⁾ なるものへのホールなりの注意ゆえである。

siteにおいて現象的なるところへ還帰しつつideaという力のおとずれを待つ。これをホールはメタフィジクスと呼んでいる。

以上のようなホールの言葉の解明を経つつ、作品化というホールの建築することについて—「幕張 集合住宅 (Makuhari Housing)」すなわち「幕張ベイタウン パティオス11番街」(「幕

張」と略して呼ぶことにする) というホールの建築することについて—その実践における建築的思索を分析するのが本稿である。

2 作品化という実践にみられるホールの建築的思索

「幕張」にはおおきく以下のような流れ (リニアな展開流れ) と分節をとらえる。

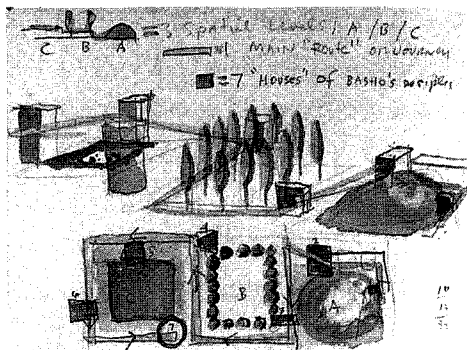
2-1 site (appearance, ...) → site (flesh, ...) — idea : 超越論的相へ

siteとの出会い。建築することのはじまりのはじまりというべきこと。

東京湾の干拓により生まれた土地であり、いままでひとが住んでいなくて、居住にかかわってなにも物語りの無いところに、ディヴェロッパー等が新しい物語りを被せてつくられていた新しいまち内にホールの「幕張」はつくられる。

前提プログラムとしては、ディヴェロッパー主導による覆いとしての物語りがあるほかに都市計画家主導による都市デザインガイドラインと呼ばれるルールが与えられており、新しいまちのすでにつくられてきていた部分もそれら前提プログラムを吸収したものであったし、前提プログラムを吸収しつつ設計プログラムを構成したものであった。ホールもそうすることになるが、実践においてホールがまず見い出さなければならなかったのは、設計プログラム (design上のコンセプト) を導く (designを主導する (drives) [In, 11/ 15]) ideaと呼ぶコンセプト、いわばコンセプトのコンセプト、であった。

この建築することのはじまりというべきおとずれてきたideaは1992年10月13日の日付をもつ一水彩画 (watercolor (written in water)) である。⁹⁾



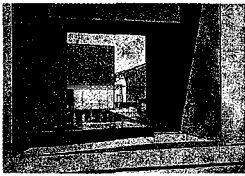
「1992年10月13日の日付をもつ一水彩画 (断面画とアイソメ画と平面画) =
一本の主な「路」〔細道〕+
七軒のその路に沿ってあらわれる芭蕉のかかわる『家々』+
三つの地盤レベル; A/ B/ C」

この水彩画に記されている芭蕉（BASHO）については、『奥の細道』〔の英米訳〕に学んだという。¹⁰⁾ ホールにおいて想起された（学ばれた）芭蕉の〈所在〉と〈行旅〉との重なり、その表現としてのidea。家たちには〈さび〉た色あいがあえて施されているようであるし、Cの水庭とは、ホールがかけがえのない体験をした龍安寺とその石庭を思い描いたものという。（「その池は僕の好きな日本の或る場所への密かなオマージュです。その場所とは龍安寺です。ここには砂も石もないけれど…（The pond is my secret homage to my favorite place in Japan, Ryoanji. There's no sand and stone here but …） [GA, 53]」）

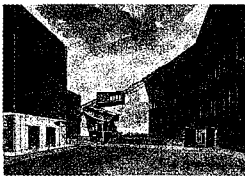
siteに待たなければならなかったのが、そのideaであったが、そのように明瞭に示されるideaと重なりあう、「つよい現象的なものをもつ空間の実現（to realize space with strong phenomenal properties） [In, 16]」のための模索がホールにはある。ideaと重なりあう、その建築作品での日々の建築体験という、知覚の（現象的）断片を、前もってつくりあげることの模索。この模索のためにまた水彩画を描き、模型をつくる。「幕張」についてはそれら水彩画や模型は公表されたものには見当たらないが、ideaの属する相からdesignの属する相に移行するあたりで描かれている（ドローイングや）模型や水彩画は公表されており、それらにはideaと重なりあう知覚の断片を前もってつくりあげようとする試みが見られる。

2-2 idea → design : 超越的相へ

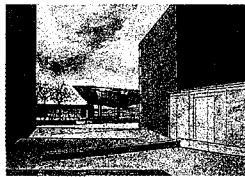
水彩画でこれまでに公表されているものはこれら〔順にEL, 17/ 16/ 17/ SH, 138/ 138〕である。



α)



β)



γ)



δ)

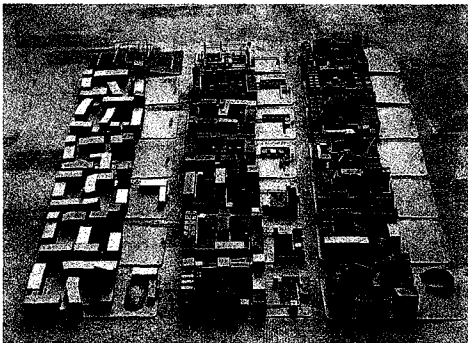


ε)

ideaの水彩画の「一本の主な『路』」に記されている矢印の流れに沿うであろう体験の順に並べてみた。α) の視覚(知覚)の的(まと)のあたりには空間の抜けとのちに「青影舎(house of blue shadow) [以下も同じくIn, 116]」と呼ばれることになる家と「落柿舎(fallen persimmon house)」(芭蕉の弟子去来の草庵でそこに芭蕉を迎えることになった家の名)と呼ばれることになる家が見える。β) の視覚的的のあたりにはやはり空間の抜けと「落柿舎」が見える。γ) の出発地点(この地点は建設予定地外の土地)を振り返る視覚的的のあたりに見える家は実際にはつくられなかった(呼び名は不明だが, ideaの水彩画ではこのつくられなかった家を入れて七軒)。その視覚的的のあたりにはやはりちょうど空間の抜けをもつ。δ) の視覚的的のあたりには、空間の抜けはなく、「水映舎(water reflection house)」とその右上方の「反陽舎(sunlight reflection house)」と呼ばれることになる家が見える。ε) の視覚的的のあたりには空間の抜けがあり、その右やや上方で「幻彩舎(color reflection house)」と呼ばれることになる家が視線を引き寄せる。これら水彩画には(終着地点にあたる?)「無舎(house of nothing)」と呼ばれることになる家(後掲の写真²⁾)内上方のものがあられけくものがないが、公表されていないものに同様にあられているのではないか。

designへの移行においては、与えられたプログラム(与えられるdesignの断片)の吸収の反映がある。この吸収されるプログラムとは、都市郊外の居住の場所づくり(郊外住居づくり)という大前提プログラムに伴う前記したもろもろの与えられたプログラムのことである。

この相では、「地(ground) [In, 117]」と「図(figure) [In, 117]」という枠組みを、「静的」と「動的」という枠組みへ、すなわち、「重い=ひとまとめに括るブロックたち=静けさ(Heavyweight = Bracketing Blocks = Silence) [In, 116]」と「軽い=動きをもつものたち=音たち(Lightweight = Activists = Sounds) [In, 116]」という枠組みへよみかえることで、ideaと映しあうdesignへの移行を遂げている。以上を表わすドローイングがあり [In, 117], つぎのような模型群 [EL, 25] にはその移行をとらえることができる。



前掲水彩画に対応する現実につくられたものの写真は以下である。designの属する相において、たとえば α') ~ ϵ') において、 α) ~ ϵ) において、ideaをほうふつさせるものたちが「図」となって浮かびあがっている。



α')



α'')



α''')



β')



γ')



δ')



ϵ')



ϵ'')



注

- 1) 小野育雄「スティーヴン・ホルの建築的現象」(『日本建築学会計画系論文集』, 第617号, 日本建築学会, 2007年7月, 201-206頁)。
- 2) the site is unique, and therefore the idea that drives the design, the force that drives the design has to be generated around that locus of circumstances. In the beginning I intuitively drift. I'll write words and sentences make a lot of drawings and sketches. There's no way of knowing how long it will take to get to an idea.
- 3) ホールの言葉等引用文献の略号は以下による。(略号の後に引用部頁番号を記す。)
 [An] ;Steven Holl et al., *Anchoring, Third Edition*, Princeton Architectural Press, 1991.
 [SH] ;*SHINKENCHIKU, May 1996*, SHINKENCHIKU-SHA, 1996.
 [GA] ;S. Holl et al., 'Steven Holl', *GA Document Extra 06*, A.D.A. EDITA Tokyo, 1996.
 [In] ;S. Holl et al., *Intertwining*, Princeton Architectural Press, 1998.
 [EL] ;S. Holl et al., 'Steven Holl', *EL croquis 78+93+108*, EL croquis editorial, 2003.
 ホールの言葉については、日本語への翻訳が上の文献に含まれる場合にも、本稿のために上の文献の原語からすべて翻訳し直している。
- 4) Through a link, an extended motive, a building is more than something merely fashioned for the site. ... /... Illumination of a site is not a simplistic replication of its "context"; to reveal an aspect of a place may not confirm its "appearance". Hence the habitual ways of seeing may well be interrupted. [An, 9]
- 5) It [site] is its [building's] physical and metaphysical foundation. The resolution of the functional aspects of site and building, the vistas, sun angles, circulation, and access, are the "physics" that demand the "metaphysics" of architecture. ... /Building transcends physical and functional requirements by fusing with a place, by gathering the meaning of situation. ... / Architecture and site should have an experiential connection, a metaphysical link, a poetic link. ... / ... Architecture and nature are joined in a metaphysics of place [An, 9-10]
- 6) The intertwining has a "between" that alternates from within to without. Our body moves through and, simultaneously, is coupled with the substances of architectural space — the "flesh of the world"(Maurice Merleau-Ponty).
- 7) Steven Holl, *Parallax*, Birkhäuser, 2000, p. 302.
- 8) [In, 16] ほか。
- 9) [SH, 138]。
- 10) [In, 116]。